

巻頭言

新会長挨拶

— VR のシュプレヒコール —



伊福部達

東京大学

この度、廣瀬通孝先生の後任として日本バーチャルリアリティ学会の会長をお受けすることになりました。私は、初代会長の館先生、第2代原島先生、第3代岸野先生とはほぼ同年代の古株というか過去の遺物のようなものです。やっと第4代の佐藤先生、そして第5代の廣瀬先生と会長が若返ってきて、これで本学会もしばらくは安泰だなと、ホッとしていたところ、不本意ながら時代に逆行することになってしまいました。新会長にできることは何なのかを真摯に見つめながら、お役目を果たしていきたいと思います。

さて、過去の新会長挨拶では、徳川幕府の歴代将軍に触れることになっているようですが、調べてみると6代目は家宣という、あまり有名でない人です。ただ、悪評の高かった5代目綱吉の「生類憐みの令」や「酒税」を廃止したことで庶民の人気を得て、その後の期待が高かったようですが、残念ながら在位がわずか3年間という短命の将軍でした。新会長が短命であるのは大変結構ですが、先代の悪政をただすことはできそうもありません。

一方、私どもは学生運動の最も盛んな時に青春を送っており、当時は、権力を破壊し、現実を否定し、世の中を混沌の状態にして初めて本物の現実が見えてくると信じていました。いわば、本質的な現実すなわち「バーチャルリアリティ (VR)」の世界を夢見ていたのかも知れません。家宣の想いもそこにあり、その想いを後世に残したかったに違いありません。時には「温故知新」の言葉のように先人たちの古き時代を訪ねることによって、新しきを知ることも大切かと思えます。

ところで、本学会は「VR と宇宙」、「VR と医療」というように「VR と X」という形で、「X」として一見して関係なさそうな分野を当てはめ、それらの分野を結びつける「ハブ」の役割を果たすことで、限りなく広がってきました。同時に、本学会は新しい魅力的な分野なら何でも取り込んでしまおうという「ブラックホール」のような力も持っており、ブラックホールに呑み込まれた若い人たちも少なくないと思います。ただし、「X」として一通りの分野を巡った感もありますので、新天地を求める努力が必要となるでしょう。また、ブラックホールに住んでいる若い人たちが「大海を知らず」にならないようにすることも私どもの役割です。

翻って、最近のアカデミズムやアートに関わっている人たちは、昔に比べると荒唐無稽と思えるようなアイデアを発表したり、アートで表現したりすることが難しくなってきました。そして先人たちによって積み上げられた膨大な成果に埋没されないように必死にもがいているように見えます。それにもかかわらず、せっかく面白そうなアイデアを発表しても、先人たちが、「それはどうの昔に私が試みたものだ」と一蹴してしまうものですから、ますます新しい発想や作品が生まれにくくなっています。実は、このような時代だからこそ、本学会の果たす役割は極めて大きいと思っています。

VR 学会のミッションは、今までの伝統、先人の成果、既存の学問やアートの方法論に縛られないで、自分自身で考え、作り、発表する場を提供することと思っています。このミッションを実現するために、井戸の中から出て大海を臨み、もっと広い分野に「VR と X」の X を見

出し、そこに魅力ある新しい領域を開拓していきましょう！未だ解かれていないナゾの謎解き、未だ開発されていないモノの物作りに挑戦しましょう！そして、先人たちは、新しいレールを敷いて自分の足で歩こうと努力している若い人たちを励まし、見守って行きましょう！歳のせいか、どうしても昔の学生運動で良く聞いたシュプレヒコール（デモのスローガンの合唱）のように「！」が多くなり、テンションだけでなく血圧も高くなりそうなので、現実に戻ります。

現実には、出口の見えない長引く不況、高齢化に伴う社会保障の負担、そのうえ追い打ちをかけるような大震災と続き、明るい話題が全く影を潜めています。しかし、歴史が変わっていくことは必然であり、マイナス面ばかりを見て悲観するのではなく、マイナスをプラスに変える工夫が私どもに求められています。

私は福祉工学という分野を歩き続けて40年以上になりますが、この間に、日本人の価値観は大きく変わり、また、多様化していることをつくづく感じます。一昔前は、「金持ちになること」、「偉くなること」、「長生きすること」を目標としていた人が多かったのに対して、最近では「いかに楽しいか」、「やりがいがあるか」、そして「いかに快適な生活を送るか」ということに価値を置く人たちが増えていると思います。そのような中で快適な生活を支援するためのテクノロジーの一つとして「福祉のための工学」に何かを期待しているものと想像します。

VRは、新しい多様な価値観に応えるには極めて相応しい分野です。例えば「高齢社会でも楽しく、やりがいがあり、快適な生活を送れるようにするためのVR」というテーマだけでも魅力あるたくさんの課題が思い浮かびます。また、私が取り組んできた「見る」「聴く」「話す」を助ける福祉工学でもVRは極めて有力な道具になります。VRは人工的に作った感覚刺激によって、存在しないものでもあたかも存在するかのように感じさせる

技術ですので、このVR技術は失う前の感覚を惹起させるのに十分に生かされます。少子高齢社会と高度情報社会という時代の中で生まれた新しい課題を、人間と社会のためにプラスに生かすこともVR学会の重要な役目と言えます。

一方では、「VR技術者認定制度」も軌道に乗り、VRの領域を具体的に人間や社会に生かす人材が生まれてきています。これをさらに推し進め、新しい価値観に応えるよう広げることによってVRの存在意義はますます高まることでしょう。また、遊びと学びが一体となった伝統的イベント「VR文化フォーラム」も日常から離れて別世界を垣間見ることにより、我々の視野を広げることに貢献してきました。これも学会員の皆様が待ち望んでいるイベントですので、わくわくするような企画を立てることができればと思います。

幸い、榎並和雅副会長と岩田洋夫副会長が引き続き支えて下さることになり、大変、心強く思っております。また、多くの若い理事の方々は、私の古くなった脳ミソを刺激してくれるばかりでなく、学会員の皆さんを勇気づけながら牽引してくれるものと期待しています。

言うまでもなく、学会は会員の皆さんが主人公ですので、閉塞感の漂う世の中に向けて、「VRで日本を、世界を、元気に明るくしよう！」と声高々にシュプレヒコールをあげてください。そのエネルギーを少しでも吸い上げ、会員ばかりでなく、広く社会に届ける役割を果たしていきたいと思っていますので、皆さまご協力をよろしくお願いいたします。

【略歴】

伊福部 達 (IFUKUBE Tohru)

東京大学 名誉教授 (高齢社会総合研究機構)

1946年北海道生まれ。1971年北海道大学工学研究科修士課程(電子工学)修了、北大・応用電気研究所・助手、同助教授、米国スタンフォード大学・客員助教授を経て1989年北大・電子科学研究所教授、2002年東京大学・先端科学技術研究センター・教授。2011年より東大・高齢社会総合研究機構・特任研究員、工学博士。この間、福祉工学の開拓と産業応用の研究に従事。北大名誉教授、東大名誉教授、2001年電子情報通信学会フェロー、日本学術会議連携会員、VR学会フェロー。著書に「音声タイプライタの設計」(CQ出版1983)、「音の福祉工学」(コロナ社、1997)、「人工現実感の評価」(編著、培風館、2000)、「福祉工学の挑戦」(中公新書、2004)、「ゴジラ音楽と緊急地震速報」(監修、ヤマハミュージックメディア、2012)など。